上海電影事業興隆考
——一九二〇年代上海娯楽文化の中の映画館—

白　井　啓　介

1.　映画と上海

中国映画と言えば上海、ということに相場が決まってしまう。だが、なぜ上海なのか、そしてまた映画が始まった頃の上海はどのような都市空間であり社会環境であったのかについて、近代史研究では、社会経済史的側面からの詳細な考証が行われているものの(1)、社会生活の中での娯楽文化としての視点では、あまり明らかにされているとは言い難い。一方映画史においては、1905年を中国映画百周年の起点と措定する言説が幅をきかせているが(2)、そもそも、1905年に初めて中国国産映画が撮影されたとする認定自体、再検討しても良い余地を含むと見なされる。試行としてや一時的な撮影ではなく、映画撮影の組織と態勢が生まれ、恒常的に作品としての国産映画が生み出され、映画興行、さらに経常的な映画放映が定着するには、もう少し時間を下らなければ実態は現れて来ない。

台湾大学の胡平生は、抗日戦争前の十年間が上海娯楽文化の形成発展期であることを、映画や芝居の上演隆盛と都市娯楽文化の興隆の調査から究明している(3)。中国国産映画ばかりでなく、外国映画にも視野を広げて考察した点は評価に値するものの、しかし、抗戦前十年と言うと、1927年からとなり、これでは、すでに映画館、映画撮影組織等がすでに基本的に整備された後となり、興隆期の動態を捉え損なうおそれが生じる。

本稿では、このように上海に映画が移入され、その後国産映画が自製されるにいたる過程を探究する一助として、1920年代の上海映画環境を検証することとする。

2.　1920年代上海　発展途上の都市

1920年代というと、我が国ではしばしば引き合いに出されるレポートがある。芥川龍之介の『支那游記』である。日本文学の研究では、芥川の中国漢学への造詣、志向の一斑を示すものと認められることが多い。

しかし、芥川が報告する1921年の上海は、まさに「蛮市」として唾棄されるばかりで、その後の「魔都」言説とは大きな距離がある。また、芥川が「王城の地」と賛美する北京が、客観的にはそれほど美化されるに値する都市ではなかったことも明らかなことである。はたして、芥川は「見るべきものはすべて見た」のか、あるいは見落としたのかについては、すでに別に論究した[4]のでここでは繰り返さないが、ほとんど同じ時期に、芥川とは逆のコースで北京から上海へと旅したエロシェンコと比べると、芥川の見聞は時代の制約を受けたものであるとともに、芥川の志向を如実に反映したものであることも判明する。その目睹した上海、北京は、時代の様相を色濃く纏い、大きな変動の最中にあったと考えるのが妥当である。

1920年代初頭の上海は、いまだ繁栄の坂道を登り初めていない時期であり、一方の北京は衰退の坂道を転げ落ちてはいない時期、それが芥川とエロシェンコが遭遇した1921年という時代であった。この両都市の変容の動的実相を見通す視点を抜きに芥川のレポートを読むのでは、大きな偏りを生むはずだ。

こうした1920年代の上海を考察することは、上海が近代都市として大きく飛躍、変貌する過程を追跡することと軌を一にする。上海の映画産業、映画興行を基軸に考察することは、こうした上海の急成長、大膨張の一端を探ることであるとともに、中国の近代社会生活、上演事業、娯楽等のサブカルチャー、そして近代都市生活人の意識の生成過程を探索することにも連なる。

上海の都市としての形成については、すでに一定の究明が進められているので、ここでは、上海の都市形成の性格とその過程を見る一例として、その人口膨張の過程を見ておこう。

公共・法租界合計人口推移（単位：人／『上海租界志』[5] に基づき集計）

年	中国人	外国人	総計	年	中国人	外国人	総計
1865	146,052	2,757	148,809	*1915*	766,996	20,924	787,920
1890	208,851	4,265	213,116	*1920*	926,506	26,869	953,375
1895	292,753	5,114	297,867	*1925*	1,099,540	37,758	1,137,298
1900	436,922	7,396	444,318	*1930*	1,393,282	49,393	1,442,675
1905	548,848	12,328	561,176	*1936*	1,595,958	62,540	1,658,498
1910	602,505	15,002	617,507	*1942*	2,353,664	86,389	2,440,053

この人口膨張の推移から分かることは、1855年に中国人の居住が許可されて以来、上海租界における人口比率はほぼ一貫して変わりがなく、97%以上が中国人だったということだ。また、人口増加にはいくつかの山があり、大きな社会変動と戦乱が、その因をなしていることも明らかだ。

1865年から1900年までの35年間での人口増加は、30万人程度だが、その後の1915年までの15年間に35万人増加しており、さらに次の10年間で35万人、そのまた10年後に50万人が増加している。しかも、その圧倒的多数が中国人だ。これは、上海の街の形成過程の実相を示すものと言えるが、租界は、三回の拡張を経て拡大したことが、第一の理由に挙げられる。1895年から1900年の人口増加は、これに当たる。次には、その時々での周辺の戦乱のため、租界に難を逃れる中国人の流入が、人口増の大きな要因となっている。つまり、租界を中心とする上海は、当初から「移民」によって形成された都市であり、中国人による移住者の方が、むしろ大きな比重を占めていた。

人口膨張から見ても、上海の発展期は、大きく分けて1860年前後、1900年代初め、そして1920年代半ばの三回がピークであったと言えよう。

もちろん、中国人が圧倒的多数を占めるとはいえ、その統治の実権が英米仏を中心とした外国人の手に握られていたことは無視し得ない。しかし、イギリス人の支配権と生活基盤が確立した1870年代と、その40年後の社会生活、特に娯楽文化、遊興の世界で、政治的経済的優位者の意向だけが貫徹されるとは考えにくい。特に、第一世界大戦を境にした変転、英仏の地位が相対的に低下し、これに代わって米日が進出したことによる構造変化は、租界の性格を変容させるものであったろう。人口比率からすれば97%以上が中国人によって占められる都市で、一九世紀までは政治支配がその通り「植民地」的であったとして、少なくとも第一次大戦後の社会生活、日々の余暇の過ごし方、遊興、娯楽の世界にあってもなお、「植民都市」とだけ決めつけるのでは説得力を欠く。

ましてや、第一次世界大戦を経て1920年代に入ると、外国人の間でも、階層分化、序列化が進み、西洋人だからといって支配的地位に就けないロシア人のような存在も出現する。一方で、公共租界では1928年から中国人参事が席を占め、「植民都市」という構図は徐々に揺らぎ始め、中国人であるか外国人であるかが大きな指標となるより、誰でも一山当てることができる新興都市としての性格の方が上回り始めたと見るべきではないか。その人口構成、都市膨張の過程、娯楽施設、システムの開拓、拡充の進み具合からすれば、むしろ「移民都市」というとらえ方の方が実相を映した位置づけと考えられる。

3. 都市娯楽文化の開花

公共租界での土地章程の度重なる更改と、仏租界での拡張とによって租界は

膨張し、これにつれて中国人居住者も飛躍的に増大した。租界に流入してきた中国人は大きく分けると三種類で、紳商層（買弁を含む）、産業労働者、苦力等雑業肉体労働者とされる。その出身地は、江蘇、浙江を筆頭とし、そこから少し水を空けられて広東が続く状態であった。また、苦力等肉体労働従事者では、圧倒的に江北（江蘇省の長江以北）出身者によって占められていた(6)。人力車の車夫も、港湾の荷役作業も、これら江北出身の屈強なる壮丁によって供給されていた(7)。

こうした富裕貧窮両端の間で、徐々に勢力を増し、数量としても増加していったのが、都市中間層であり、その成長と増加が、ちょうど第一次世界大戦前後から第二次世界大戦にかけてであった。この中間層は、紳商層ほど資産や資金を豊富に蓄えてはいないが、貧窮層がほぼその日暮らしであったのに比べ、多少の金銭的余裕を備えるに至っていた。代表的な労働者地区である滬西の曹家渡での1917年の調査では、5人家族の労働者家庭の一ヶ月の生活費には15元が必要であったと言う(8)。ところが不熟練労働者や女工、年少工の月給は、10元未満の場合が多く、人力車夫などでは一日の収益が7～8角がせいぜいであり、彼らの1日の生活にかかる諸費用も、ちょうどこれとほぼ同額あったと言う(9)。一方、熟練工や事務職等のホワイトカラー、新聞社や出版社の社員層では、40～100元程度の収入が得られたと言われる(10)。貧窮層は確かに多数を占めてはいたが、一方でこうした経済的に多少のゆとりを備えた中間層が成長しつつあったことに注目しておきたい。こういう中間層こそが、購買消費の大きな顧客であり娯楽文化の主要な観衆となるからだ。

こうした都市中間層の成長を背景として、1912年に、黄楚九、経潤三が九江路の新新舞台屋上に上海初の娯楽場「楼外楼」を開業する。彼らはこの好業績に力を得て、続いて1915年には、劇場、寄席、飲食店等を複合化した総合娯楽遊技場「新世界」を開業するに到る。

1917年には、上海初のデパート先施（シンシア）公司が「屋上楽園」を備えて開業し、南京路が、その西側に商業繁華街の性格を付け加えるようになる。さらに同年、黄楚九が仏租界に中国最大の娯楽場「大世界遊楽場」を開業し、また1918年には、屋上に遊技場「天韵楼」を備えた永安公司（オーストラリア華僑資本）が、先施公司の向かい側に開業する。上海の娯楽文化は、その器が整備されるにつれ急速にその坂道を登り始める。

このように、消費を促すデパートや娯楽の新しい形を提供する「遊楽場」が建てられ、消費生活と娯楽を享受する場が格段に拡充するのに先立ち、旧来の

娯楽の場であった芝居小屋の方も、すでに改装刷新が進められていた。上海の劇場は、もともと京劇等の旧劇上演の場として、1866年に「満庭芳」、「丹桂園」等の劇場が、「茶園」と称して租界内に開場された。その後、二〇世紀に入っても、1900年代から辛亥革命を挟んで1910年代にかけて、上海のショービジネスの主流は芝居であり、京劇を始め、著名俳優が各茶園で興行を行い、客を集めていた。「茶園」と称される飲食を伴う茶館を合わせたような劇場で上演されるのが通例であったが、1908年に新舞台が、北京の戯院とは異なる劇場を誕生させた。これは、客席が舞台を向き、入場券を先払いする、近代的なスタイルを採用したが、このスタイルの「劇場」は瞬く間に上海に浸透していった。この西洋式スタイル、システムを採用した劇場は、1910年に「大舞台」が、翌1911年に「歌舞台」「群舞台」「丹桂第一台」が相次いで開場する。さらに「新新舞台」、「醒舞台」「竟舞台」が続き、1915年には「共舞台」等もあとに続いた。

一方、1896年8月11日に上海の徐園で上映されたのが、中国最初の映画放映とされるが、この映画は、劇映画やストーリー性のあるものではなく、「見せ物」として動く絵が見られるという程度のものと推定される。徐園が『申報』に出した広告(11)を見れば、旧暦七月で、花火の合間に「西洋影戯」が、動く絵として客引きに使われた様子が窺える。映画が、定まった場所で恒常的に上映されるのは、これより10年ほど下った、世紀を跨った後のこととなる。

4. 常設映画館の誕生から定着

上海に最初の常設映画館が出現したのは、1908年である。スペイン人A・ラモス（雷瑪斯）が、海寧路と乍浦路の南東角に座席数250余のトタン張りの虹口活動影戯園を開設したのが、それである。もとは、スケートリンクであったという。これに先立ち、ラモスは、1904年に福州路の青蓮閣で最初の映画興行も行っていたが、いよいよ常設館開設の運びとなったのであろう。ラモスは、続いて1909年には、虹口活動影戯園から海寧路を西に百メートルほど離れた地点、四川北路と交叉する北東角に維多利亞（ビクトリア）影戯院を開く。

翌1910年には、ポルトガル人ハーツバー（郝思倍／S.G.Hertzberg）によって、愛普廬（アポロ）活動影戯院が四川北路と海寧路が交叉する北西角に開館する。すでに開館した虹口、維多利亞とは、実に目と鼻の先、特に維多利亞

とは、四川北路を挟んですぐ向かい側である。

1913年には、現海寧路と江西北路の交叉点北東角（愛普廬から西へ50メートル弱）の場所に、英国人林発（リンハット？）が鳴盛梨園を買い取って、愛倫（アイリーン）活動影戯院を開館する。こうして、ようやく後続の常設映画館が誕生しつつあった機運の中、先行したラモスは、さらに静安寺路（現南京西路）に夏令配克（オリンピック）影戯院を開き、映画館の開業機運に新生面を開く。1914年9月8日に開館したこの夏令配克は、それまでの映画小屋でしかなかった映画館とは一線を画す、高級で優雅な娯楽場を提供した。たとえば切符代金を見ると、虹口界隈に開館した初期の映画館が、大体一等席3角、二等席2角、三等席1角であったのに対し、夏令配克は桟敷席を備え、これが1.5元、上等席が1.2元、そして最低が8角という設定だった[12]。8角と言えば、当時の人力車夫が一日中走り回って得られる収入に匹敵した。

こうして、1910年を挟んだ数年のあいだに、にわかに起こった映画館開業の動きは、1914年からの第一次世界大戦で、一時冷却のやむなきにいたる。世界大戦が終結した1918年秋以降、上海での映画館開館熱は再燃し、大戦前の5館が、1922年末までの4年間で12館にまで増加する。その12館は次の通りだ。

1. 上海大戯院（1917年6月開業；北四川路虬江路）2. 愛普廬影戯院（前掲）3. 維多利亜影戯院（前掲）4. 夏令配克影戯院（前掲）5. 新愛倫影戯院（前掲）6. 共和活動影戯院（1915年開業；南市西門方浜橋〈現中華路方浜路口〉）7. 滬江影戯院（1914年「東和活動影戯園」として開業後転売改称；武昌路乍浦路角）8. 卡徳影戯院（1917年開業；卡徳路〈現石門二路新閘路口〉）9. 虹口大影戯院（前掲）10. 万国影戯院（1917年9月開業；東熙華徳路〈現東長治路〉）11. 恩派亞影戯院（1921年開業；八仙橋霞飛路口〈現淮海中路龍門路口〉）12. 法国大影戯院（1921年開業；三洋涇橋南吉祥街中〈現江西南路〉）[13]

この12館の分布を見ると（末尾「上海老電影院分布図」参照）、先行の5館が虹口に偏在したのに対し、中国人街である南市（共和活動影戯院）、仏租界（恩派亞影戯院と法国大影戯院）、そして公共租界の中区（現黄浦区）の静安寺路から競馬場北側周辺（夏令配克影戯院と卡徳影戯院）に進出していることが注目される。当時の娯楽、遊興の一等地は、福州路の西側から競馬場までの辺りか、芝居小屋はこれに加えて南市の方に勢いがあったから、映画館は、まだその周縁部でようやく地歩を築き始めたと言える程度であった。ただ、虹口大影戯院も夏令配克も外国人の経営であるのに対し、上海大戯院が中国資本

であることなど、映画事業が徐々に中国人の手に移り始めたことも見て取れる。

1922年の末に12館に達した上海の映画館は、その後も開業の勢いを増して行く。翌1923年に入ると、2月9日に卡爾登（カールトン）大戯院が派克路（現黄河路）に開館するが[14]、卡爾登は、すでにダンスホールとホテルを営業しており、定評あるダンスホールの楽団が映画館の伴奏をすることで映画に付加価値を付けていた。また、この卡爾登開業の一週間後の2月16日には、競馬場を挟んでほぼその南側に当たる六馬路（現北海路）に、申江大戯院が開館する。ここは、もともと京劇などの芝居を上演した申江亦舞台であり、その舞台からの転業であった。そして、この申江大戯院は、開館当初から中国国産映画の上映に特色を出し、3年後の1925年からは中国国産映画上映専業へと特化して行く。

こうして増加を続けた上海の映画館は、1920年代の10年間で、上海租界内の館数がほぼ倍増することになる。たとえば、『良友』1931年10月号第62期のグラビア頁には21館が掲載紹介されており[15]、映画館急増の趨勢が窺える。

1922年までの増加に比べ、1920年代の10年間の映画館新規開館は、上海の各区にわたり、それこそ上海中に満遍なく映画館が行き渡り、なおかつ豪華で最新設備を備える充実の様相を呈する。特に、1928年11月11日に、一等地である競馬場近辺に新たに開館した大光明影戯院（静安寺路）は、先行の卡爾登大戯院のすぐ南隣に位置し、上海随一の規模と豪華さを誇る映画館として、その後長く君臨し続けて行く。

ただし、この21館は、1922年に営業していた映画館がすべて残存したわけではなく、経営者が代わって改称して再出発するところもあり、単純に倍増とは言えないものだ。1922年末時点から営業を続けていたのは、1931年10月時点では夏令配克大戯院、上海大戯院、虹口大戯院の3館だけでしかない。

上海年次別映画館開館数（『上海電影志』[16]「大事記」及び『申報』掲載開幕広告等に基づき集計）

年	館数	年	館数	年	館数	年	館数	年	館数	年	館数
1908	1	1915	1	1922	0	1929	4	1936	0	1943	1
1909	1	1916	0	1923	4	1930	8	1937	0	1944	0
1910	1	1917	3	1924	2	1931	3	1938	0	1945	1
1911	0	1918	0	1925	1	1932	6	1939	5	計	65
1912	0	1919	0	1926	2	1933	3	1940	2	未確定不明	13
1913	1	1920	1	1927	1	1934	1	1941	1		
1914	2	1921	2	1928	3	1935	1	1942	1		

映画館の開館を年次ごとにまとめると上表の通りとなる。最盛時に営業していた映画館は50館程度と推定されるが、それぞれ盛衰浮沈があるため、延べ数ではもっと多く、80館近くが開館したことが記録として確認できる。その中には、夏場だけ営業の露天映画館も含まれ、たとえば虹口に開設された消夏露天電影場と雨園露天電影場が、それぞれ1923、24年頃に開館しており、静安寺路（現在の南京西路）には聖喬治露天影戯院と大華飯店露天影戯場が、それぞれ1924年25年に開館しているが、ここではそれを計上していない。

1908年から19年までの12年間に10館が開業し、20年21年に3館が開業したはずだが、すでに見たとおり、1922年末に営業していた映画館は12館であった。続いて1920年から29年までの10年間には新規に20館が開館したが、1931年の『良友』の紹介では営業館は31館であった。さらに1930年から39年までの10年間には27館が開館している。単純な開館数としては、1930年代の方が上回っているが、1920年代の20館開館は、多様な可能性（たとえば上記の露天影戯院など）を探求した上昇期の勢いを示すものと見てよいだろう。

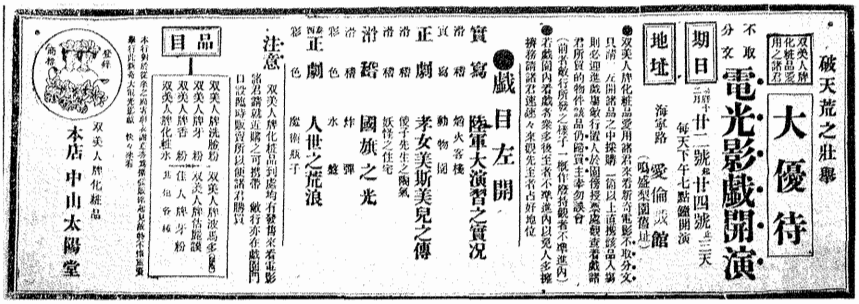
こうして上海の映画館は、1930年代半ばには41館、公共租界内26館、仏租界内11館、華界内4館に達する。また工部局の統計では、1936年の上映作品は劇映画457本、ニュース映画1,211本という[17]。

5. 映画放映状況

このように、1908年にようやく呱々の声を上げた映画放映事業は、その後急速に娯楽の中心の座に駆け上がり、上演興行の王座の位置にあった戯曲に迫る勢いとなるが、その時期が1920年代と言えるだろう。映画が、観客の心を射止め、集客力を強める上で大きな効果を上げたのは、劇場にかかる作品が次々と新作、新片を提供できたことによろう。当時の上海の映画館では、一本の映画が2週間に渡って上映され続けることはほとんどなく、長くても1週間程度、通常は3～4日で1劇場を終え、次の映画館に回される配給形態であった。

そこで、このように頻繁に上映作品を更新し、新しい作品で観客の足を引き寄せることができた映画館では、どのような作品を放映していたのかを探索することとなる。この探求に有力な手がかりとなるのは、新聞に掲載される毎日の映画館の上映広告だ。上海には、1872年以来『申報』が発行されており、1890年代以降は芝居の広告が毎日の紙面に載るようになっていた。

ただし、1908年に開館した虹口活動影戯園を初めとする初期の開館映画館は、こうした新聞広告を、開館後も長らく出稿しない。1910年代に入ってからは、各映画館が上映広告を掲載するようになったものの、その広告の形式は極めて簡単なもので、作品名は特定しにくい。たとえば、1913年暮れに愛倫活動影戯院が鳴盛梨園を買い取って開館した際、双美人化粧品の中山太陽堂とタイアップして開幕興行を行ったが、その広告がこの当時の告知広告の形式をよく表している。記録・ニュースフィルムと短篇の「滑稽」数本、そして「正劇」と称するドラマを組み合わせているが、作品の実態は今ひとつよく分からない。



『申報』1913年12月22日

この形式は、その後もしばらく続き、定期的に新聞に映画広告が掲載され、かつその広告が映画の題名によって訴求されるようになるのは、1920年代にさしかかってからとなる。

一方、中国国産映画の制作は、1909年に米国人ベンジャミン・ブラスキー（布拉斯基）によって設立された亞細亞影戯公司が『西太后』『不幸兒』の2部で試行を行うが、1913年に張石川、鄭正秋、杜俊初らが新民公司を組織した上で、『難夫難妻』等十余部を制作して、同年初の国産映画を封切っていた。しかし、その後の第一次世界大戦によりフィルムの供給が途絶え、この亞細亞影戯公司は頓挫してしまっていた。

第一次大戦後の1918年、商務印書館が活動影戯部を設立して映画制作に乗り出すが、その作品が実際に映画館に掛かるのは、翌19年以降となる。1921年には中国影戯研究社が『閻瑞生』を封切り上映し、上海影戯公司が1922年1月に『海誓』を、さらに新亞影片公司が『紅粉』を同年5月に公開し、ようやく国産劇映画制作の機運が高まってきていた。こういう中で、1922年の2月に明星影片股份公司が設立して中国国産劇映画の態勢が整ってきたところだった。

したがって、1908年に虹口活動影戯園が開館して以来、この1920年代初頭までの間、映画館で上映されたものは、基本的に外国映画であった。しかも、そこで上映される作品がどのような作品であったかについて、上映広告でもあまりはっきりした形では示されないのである。ここでは、その作品名が広告に原語で明示されるようになり、中国国産映画と競合し合い始めた1924年1月の放映作品（作品本数は111本）の国別分類を見てみよう。

中国国産　18本/111本　16.2%

1.孤児救祖記（1923明星影片）／2.死好賭（1921商務印書館）／3.蓮花落（1923商務印書館）／4.紅粉（1921新亞影片）／5.天書（1923上海影戯）／6.拾遺記（1922商務印書館）／7.車中盗（1920商務印書館）／8.張欣生（1922明星影片）／9.頑童（1922上海影戯）／10.孝婦羹（1923商務印書館）／11.海誓（1921上海影戯）／12.王生夢（?中国滑稽趣片）／13.棄兒（1923上海影戯）／14.憨大捉賊（1921商務印書館）／15.天女散花（1920商務印書館；梅蘭芳）／16.李大少（1921商務印書館）／17.勞工之愛情（1922明星影片）／18.滑稽大王游滬記（1922明星影片）

アメリカ　44本/111本39.6%

1.自由誤（1922 The Flirt/危険なる処女時代）／2.寶蓮遇險記（1914 The Perils of Pauline; Pearl White寶蓮）／3.跳舞熱（1920 The Dancin' Fool/ダンス狂）／4.鐵路英雄（1923 Westbound Limited/西部行特別列車）／5.何事顧慮（1923 Why Worry; Harold Lloyd; 空城計/巨人征服）／6.遇人不淑（1922 Stardust/星の屑）／7.富人之妻（1922 Rich Men's Wives/母よ恋し）／8.俠盗羅賓漢（1922 Douglas Fairbanks范朋克/ロビンフッド）／9.Beyond Price（1921 Pearl White寶蓮/真性の愛）／10.畏羞女兒（1920 The Little 'Fraid Lady/怖えし少女）／11.皇帝夢（1921 King, Queen & Joker; Sydney Chaplin）／12.女中丈夫（1924 A Lady of Quality; Virginia Valli/女性の輝き）／13.風流水手（1921 A Sailor-Made Man; Harold Lloyd/ロイドの水兵）／14.愛情神聖（1920米The Right to Love/愛する権利）等

フランス　2本/111本　1.8%

1.小酒店（1919法Le Petit caf）／2.因禍得福（法國著名長片）

未特定　47本/111本　42.3%

1.獣戯（? Animal Acting as Men）／2.耶蘇本紀（? The Life of Jesus Christ）／3.風流女子／4.救国英雄／5.殘鐘憾／6.寶光箱／7.玉潔冰清／

8. 金銭禍／9. 鐵路潮 10. 印度大盗／11. 為父復仇／12. 眞假情人（Chaplin?）／13. 怪醫院（Chaplin?）／14. 斐洲歴險記／15. 竊國賊／16. 恐怖黨／17. 難兄難弟等

翌 1925 年 1 月放映作品（作品本数は 58 本）では、中国国産は 15 本で 25.9%、一方のアメリカ映画は、15 本で 25.9%。フランス映画が 3 本の 5.2%、ドイツ映画とデンマーク映画が各 1 本で 1.7%を占めている。ただし、ここでも未特定（外国製）の作品が 23 本、39.7%存在している。

以上の上映広告の集計から、1924 年について言えば、特定できたものだけで見ると、アメリカ映画 44 本 39.6% に対し中国国産映画が 18 本 16.2% であるから、半分近くとかなり善戦しているようにも見える。しかし、このほかに特定できていない 47 本 42.3% の作品のほとんどはアメリカ映画と推定されるから、80% 近くを占めるアメリカ映画の独壇場と言える状態である。

1925 年も、中国国産映画は 15 本で 25.9%と 4 分の 1 を占めるが、この年は旧正月が陽暦の 1 月末に入り新聞広告の掲載数が減ったため（『申報』は、旧正月の年末年始初三まで休刊）、総数が少なかったことによるもので、中国国産映画そのものの数は増えてはいない。アメリカ映画も、特定できたものだけで言えば 15 本で 25.9%と中国国産映画と変わりないが、ここでも未特定の 23 本 39.7%の作品の大多数がアメリカ産と想定できるので、3 分の 2 はアメリカ映画によって占められていたことになる。アメリカ以外の外国映画は、フランス映画もドイツ映画も、デンマーク映画などもあるものの、その数は極めて少ないことが分かる。

1920 年代半ばの 24 年 25 年を見た限りでは、圧倒的にアメリカ映画が映画館を賑わす状態であったと認定できる。

5. 結びに代えて―映画館の差別化と立地

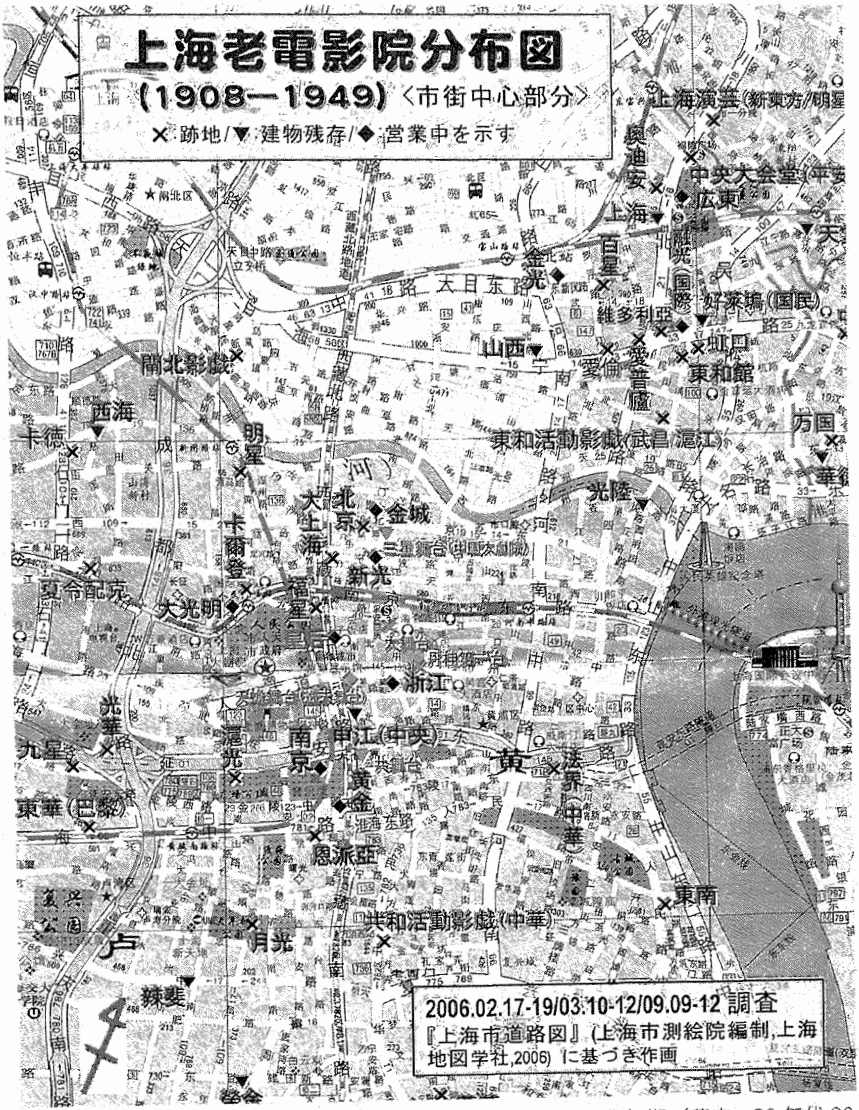
以上、1920 年代に興隆の緒に就いた上海映画事業の一端を見た。この後、1930 年代中盤にかけて、映画館の開館、作品の供給、そしてその質的向上がさらに上向きに展開する。その基本的な雛型は、すでにこの 1920 年代に形成されていたと見ることが可能だろう。1930 年代では、映画館館数が増加するとともに格付けや系列がさらに細やかに形成され、また地域的にも、広範囲にわたって開設されてゆく。租界の中心部だけでなく、市街地からやや離れた滬西の曹家渡（前出の労働者地区）やその北西の普陀にも、さらには租界東端の楊樹浦あたりまで映画館が開館するにいたる。また、比較的手薄であったフラ

ンス租界西部にも、蘭心大戯院（1931年12月）や国泰大戯院（キャセイ；1932年1月）など、現在も営業を続ける映画館が誕生する。こうして1930年代から40年代にかけて、霞飛路（現淮海中路）から愛多亞路（現延安中路）沿いに新型映画館が開館してゆく。

1908年に虹口に誕生した映画館は、当初は周縁部で、当時の主流であった京劇等の上演興行とは離れたところで営まれた。この理由については、劇壇（劇場俳優を含む）の因襲的環境（幇が取り仕切る世界）とは別の世界で始めざるを得なかったこととか、虹口が波止場に近く当初の想定観客が船員であったらしいこととか、種々の理由が考えられるものの、確証を得られるような答えは今のところ持ち得ない。ただ間違いないことは、その後急速に租界中心部に進出し、豪華で高価な映画館が誕生するにつれ、娯楽文化の中で市民権を獲得していったと想定されることだ。

1920年代後半から30年代にかけて、映画館の序列化は進み、夏令配克大戯院や卡爾登大戯院が頂点に立つだけでなく、上海大戯院や奥迪安（オデオン；1925年10月開館）も一番館として地歩を築いて行く。さらに1930年代に入ると大光明影戯院（1933年6月大光明大戯陰 Grand Theatre として改装）、国泰大戯院等も一番館として一流の列に加わる。また、場末の三流小屋が相場だった中国国産映画も、申江大戯院（1925年から中央大戯院と改称）を専門館として地位を高めて行く。そして、この映画館の序列化、階層分化は、当然観客の底辺拡大を生むとともに志向の分化とも密接に絡む。1935年に映画監督の沈西苓は、当時の観客を4種類に分類し、第1種に欧米映画を直接原語で見る階層があることを指摘している[18]。

こうしたその後の展開を見通した上で、各映画館の序列とその変動、そしてそこでの上映状況を、さらに精緻に調査分析しなければならないと考えている。本稿は、そのための試行の一環と位置づけておきたい。



上海老電影院分布図（市街中心部分）黒字：1910 年代 20 年代初期／薄字：20 年代 30 年代初期／最薄字：30 年代後半 40 年代

注

(1) 中国では、『上海市地方志』（「総述」「区県志」「専業志」「年鑑（1996年以降）」「特色志」の5部構成；上海志地方志辦公室のサイト〈http://www.shtong.gov.cn〉から各志の全文を縦覧できる）の百に渡る専業志の一巻を構成する『上海租界志』（同編纂委員会、2001年11月上海社会科学院出版から出版）他が、詳しい資料を提供している。我が国では高橋孝助・古厩忠夫編『上海史――巨大都市の形成と人々の営み』（東方書店、1995年5月）を初めとする上海史研究会の諸業績が、上海の都市形成を多面的に探求する。

(2) 中国映画の始まりを1905年とする説は、『中国電影発展史』（程季華主編、1963年2月初版、中国電影出版社）が発信地だ。同書第1巻第1章第2節：撮制中国影片的嘗試の1「北京豐泰照相館與譚鑫培等的戯曲紀録短片」の項で、1905（光緒31）年秋に北京瑠璃廠の豐泰照相館経営者であり、大栅に大観楼影戯園を開設していた日本帰りの撮影技師任景豐が、譚鑫培演ずる『定軍山』の「請纓」「舞刀」「交鋒」等の数場面を撮影したと記述する（同書第2版p.14）。さらに同書は、譚鑫培の『定軍山』での扮装写真を「1905年由北京豐泰照相館拍成戯曲片片断」として掲げる。しかし、このスチル写真が、北京豐泰照相館で撮影されたフィルムの一部であることを証明する根拠は示されていない。

2005年、中国大陸では電影百年記念として国際シンポジウムが複数開催されたが、6月に北京大学と上海大学で開催された「百年中国電影暨ACSS2005年会」では、中国側研究者からも、このスチル写真への疑問が呈されていた。

仮に、北京豐泰照相館與で1905年に『定軍山』の数場面が撮影されたと認めたとしても、それは舞台を撮影しただけの「記録」であり、それをもって作品としての中国映画の始まりとすることには無理があると考えざるを得ない。

(3) 胡平生『抗戦前十年間的上海娯楽社会（1927 1937）―以影劇為中心的探索』（台湾学生書局、2002）

(4) 拙稿「『支那游記』と一九二一年上海・北京との不等号」（『芥川龍之介―その知的空間』国文学解釈と鑑賞別冊2003.1）

(5)『上海租界志』（同編纂委員会、上海社会科学院出版、2001年11月）

(6) 高橋孝助・古厩忠夫編『上海史――巨大都市の形成と人々の営み』（東方書店、1995年5月）pp.73-74

(7) 菊池敏夫、日本上海史研究会編『上海職業さまざま』（勉誠出版、2002年8月）p.160

(8)『上海史――巨大都市の形成と人々の営み』（前出）p.149

(9)『上海職業さまざま』（前出）pp.158-159

(10) 陳明遠『文化人与銭』（百花文芸出版，2001年1月）pp.73-77

(11)『申報』1896年8月10日に徐園の広告が掲載され以下の内容が見える。"初七乞巧会，爰蒙同好诸君，在园内陈设古玩、异果奇花，兼叙清曲。是夜准放奇巧焰火。又一村并演西洋影戏，惟初八九两日因诸君余兴方浓，故再陈设古玩两天，以供众览。

特白。”ここで「西洋影戯」と称するものが映画と想定されるが、その内容については劇映画とは考えにくい。

(12)『申報』1922年10月5日、明星影片公司『滑稽大王游滬記』『労工之愛情』封切りの際の広告による。この代金は、明星影片公司最初の作品公開のため、多少プレミアムが着いた可能性もあるが、同月16日のイタリア映画の広告では2元、1元の価格付けがされているから、特に高いとは言えない設定だ。

(13)『申報』1922年12月28日「影戯院一覧」による。

(14) 卡爾登影戯院も切符は高額だった。『申報』1923年2月8日掲載の同館開業広告によると、花楼2元、包廂1.5元、優等正廳1元、特等正廳6角との値付けであった。

(15)『良友』に掲載紹介された21館は、以下の通り：1.光陸大戯院（博物院路）Capitol Theatre　2.新光大戯院（寧波路）Strand Theatre　3.夏令配克大戯院（静安寺路）Embassy Theatre　4.大光明影戯院（静安寺路）Grand Theatre　5.北京大戯院（北京路）Peking Theatre　6.巴黎大戯院（霞飛路）Paris Theatre　7.上海大戯院（北四川路）Isis Theatre　8.百老匯大戯院（百老匯路）Broadway Theatre　9.光華大戯院（愛多亞路）Kwang Wah Theatre　10.卡爾登大戯院（1923年2月9日開館；静安寺路）Carlton Theatre　11.南京大戯院（愛多亞路）Nanking Theatre　12.奥迪安大戯院（北四川路）Odeon Theatre　13.虹口大戯院（乍浦路）Hongkew Cinema　14.浙江大戯院（浙江路）Chekiang Theatre　15.黄金大戯院（八仙橋）Crystal Palace　16.新東方劇場（北四川路）New Eastern Theatre　17.東海大戯院（茂海路）The Eastern Theatre　18.國民大戯院（好莱塢）（乍浦路）People’s Theatre　19.九星大戯院（福煦路）Kui Sing Theatre　20.福星大戯院（西藏路）Foh Sing Theatre　21.山西大戯院（山西路）Shansi Theatre

(16) 上海電影志編纂委員会編、上海社会科学院出版、1999年10月

(17)『上海租界志』（前出）pp.519-520

(18) 沈西苓「怎樣看電影（『大衆生活』第1巻第4期、1935年12月）。ここでは胡平生『抗戦前十年間的上海娯楽社会（1927 1937）—以影劇為中心的探索』（前出）による（同書、pp.23-24）

（文教大学）